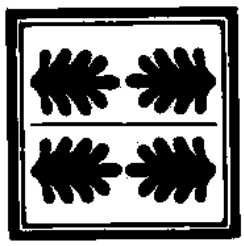
新西遊記(上)

陳舜臣



講談社文庫

新西遊記(上)
陳舜臣
昭和53年6月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京(03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国オフセット株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Chin Shunshin 1978
Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

新西遊記(上)

陳舜臣

講談社

目次

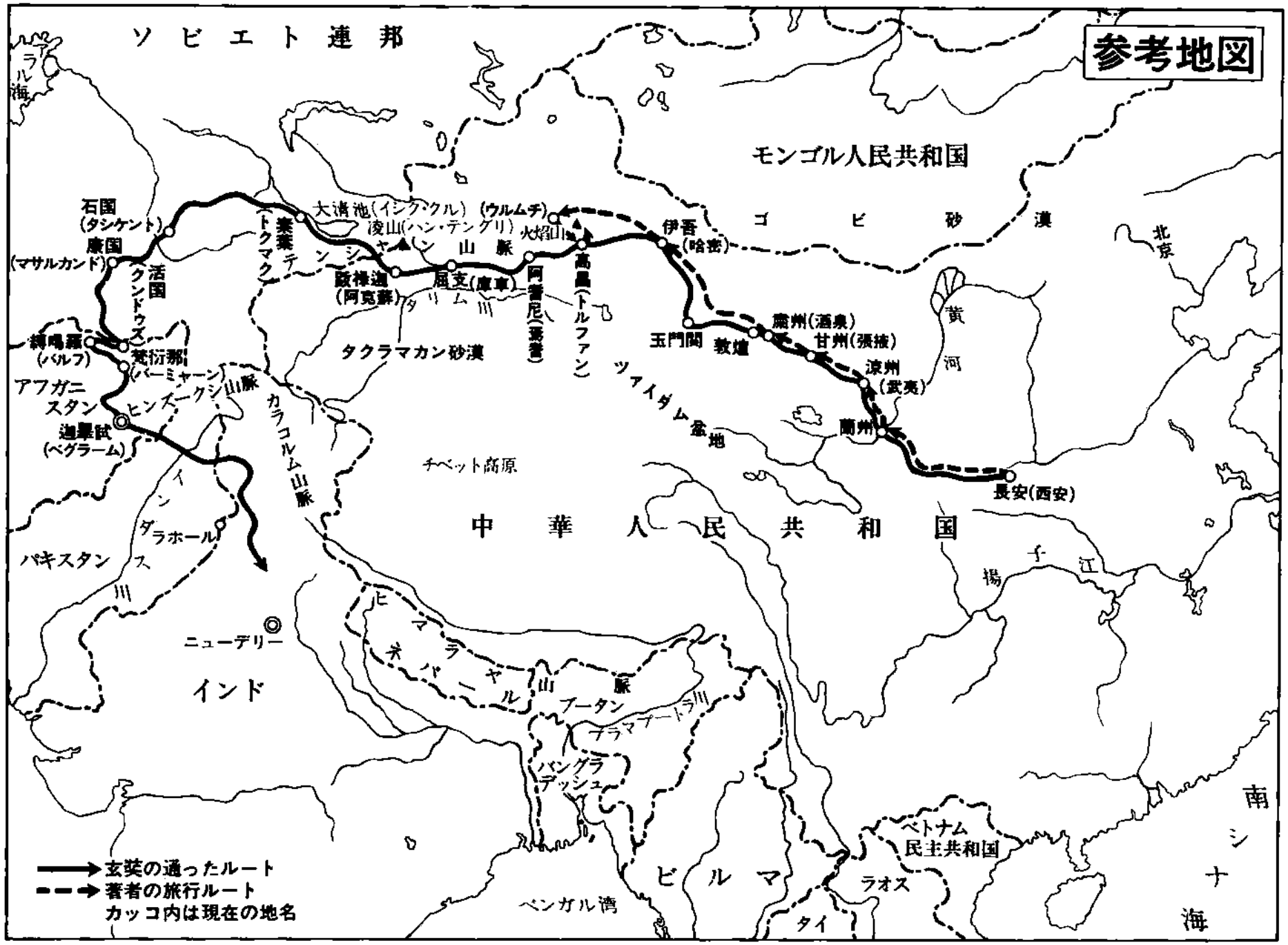
人と猿　七
猿と王様　一五
雲を呼ぶ　二四
猿の人真似　三三
撫でられて　四一
天の池　五〇
ボグド・オラ　六〇
悟空処刑　六九
釈迦如来の手のひら　七六
お経を取りにおいで　八六
悟空釈放　九六
虎や追剝　一〇五
悟空逐電　一二四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ダルマさんの夢　一二三
玉門関を越えて　一三三
王法か仏法か　一四一
妖怪初登場　一五〇
袈裟奪還作戦　一五九
八戒は元帥　一六八
流沙を越えて　一七七
哈　密　瓜　一八六
河童のこと　一九四
すり鉢の底　二〇三
火焔山にむかう　二一一
燃える山　二二〇
芭蕉洞の女あるじ　二二八
羅　刹　女　二三七
西に火あり　二四六

新西遊記

(上)


参考地図
ソビエト連邦
モンゴル人民共和国
ゴビ砂漠
北京
黄河
石国
(タシケント)
康国
(マサルカンド)
活国
クンドゥズ
縛喝羅
(バルフ)
梵衍那
(バーミャーン)
アフガニスタン
迦畢試
(ベグラーム)
ヒンズークシ山脈
カラコルム山脈
パキスタン
インダス川
ラホール
ニューデリー
インド
タクラマカン砂漠
チベット高原
中華人民共和国
ツァイダム盆地
大清池(イシク・クル)
凌山(ハン・テングリ)
火焔山
(ウルムチ)
伊吾
(哈密)
玉門関
敦煌
鄯州(酒泉)
甘州(張掖)
涼州
(武威)
蘭州
長安(西安)
揚子江
ヒマラヤ山脈
ネパール
ブータン
ブラマプートラ川
バングラデッシュ
ビルマ
ベトナム
民主共和国
ラオス
タイ
ベンガル湾
南シナ海
玄奘の通ったルート
著者の旅行ルート
カッコ内は現在の地名

人と猿

一九七三年八月の後半の二週間を、私は北京ですごした。どんなふうにすごしたかと訊かれると、「ぶらぶらと」と答えるしかない。前のとしにも来ているので、おもな観光地はたいていまわった。五年ぐらいの間隔があれば、また行ってみようと思うかもしれないが、去年の今年ではそんな気もおこらない。

新疆ウイグル自治区への旅行を申請して、その返事を待っていたのである。用件は待つことだけなので、ぶらぶらするほかはなかった。働く者の国に来てぶらぶらするのは、ちと気がひけたが、夏休みの旅行でもあるし、まあ大目にみてもらえるだろう。

二週間のうち何日か雨が降った。一度などびっくりするほど強い雨で、この季節の北京では珍しいことだったらしい。

「兄さんはツイてるのよ」

北京に二十年近く住んでいる妹はそう言った。ふつうなら、犬のように舌を出して喘ぎたくなるほどの暑さだという。それなのに、ことしは雨のためにしのぎやすい。

「反対だな。日本はことし空梅雨だったし、ぼくが出発するまで雨がなかった。この調子だと時間給水だと新聞で騒いでいたね」

私はホテルの窓から、じっと雨脚をみつめて言った。

むろん私はじっとホテルに坐っていただけではない。雨は降ったが、やはり晴の日のほうが多かったように、私もひるねをしているよりは、うごきまわっている時間のほうが多かった。ただ

そのうごき方が、「ぶらぶら」と形容するにふさわしかったのにすぎない。

胡同（フートン）をよく歩いた。胡同を路地と訳しているのをみかけるが、あまり適訳ではない。かなりひろい胡同もあるから、むしろ『横町』のほうが近いだろう。

乗合バスもはじめて乗ったが、これはたのしいものである。どの路線にも、何回乗ってもよい、定期券のようなものがあって、それが大そう安い。

同行の息子と娘は、華僑旅行社がホテルで臨時に募集している観光団に参加して、五日ほど観光地をまわった。

それがすんでも、まだ返事がない。

新疆ウイグル自治区は、中国の西の辺地である。私は「新西遊記」の取材にそこへ行こうとするのだ。

「返事があるまで、どこかまわってみませんか？　東北（満州）でも」

と、旅行社の人が親切にすすめる。

「旅大（旅順・大連）はいいところよ」

と、そばから妹も言う。

私にしても、なにも好きこのんで、あてもなくバスに乗ったり、食後の腹ごなしに胡同をぶらついたりしているのではない。だが、遠出をするわけにはいかない。タイムリミットがあるので、許可が下りると即刻出発したい。それを待機しているのだ。

「日帰りできるところなら」

と、私は注文をつけた。

「日帰りですか。……それなら西北郊の香山、ほんとうは紅葉の頃がいいんですが……あるいは西南の周口店……」

相手がそう言いかけたとき、私はあわてて口を挿んだ。

「そ、それ……周口店へ行きます」

早く答えなければ、周口店が逃げて行きそうな気がしたのである。

「では、早速行きましょう」

そう言われて、私はほっとした。

（幸先がよい！）

私は勝手にそう思った。

でたらめに、そうきめ込んだのではない。私がそう思ったのについては、いささか理由があるのだ。

周口店は、かの有名な『北京原人』が発見された場所である。北京の西南約五十キロにある石灰岩地帯で、五十万年前の原人の完全な頭蓋骨が発見されたのは、一九二九年十二月二日午後四時ごろと記録されている。

シナントロプス・ペキネンシスを、日本では原人と呼ぶが、中国では猿人という。

石灰岩のなかから猿人が出た！

まさに西遊記と関係があるではないか。

孫悟空はどこから生まれたか？

東勝神州傲来国花果山の山頂の仙石からとび出した猿こそ、西遊記のヒーロー孫悟空にほか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ならない。

岩から出た猿人、石から生まれたお猿。――このつながりが、私を興奮させ、幸先がよいと心に叫ばせたのであります。

私の予感は的中して、数日後、新疆ウイグル自治区への旅行が許可された。

ともあれ、石灰岩地帯から化石骨が出るのは、けっしてふしぎではない。石灰は骨の腐蝕を防ぐし、石灰分が骨に浸みこみ、あるいはそのまわりを灰華で包んで、保存をたすけるからである。

だが、石からなま身のお猿が生まれるわけはない。

孫悟空が石から生まれたという設定は、この物語がありうべからざる、荒唐談であることを、前もってしらせるためであろう。

『石』は不毛を意味する。だから、子供を生めない女性のことを『石女』というのである。ものを生めない石が、お猿を生みました。わっ、はっ、はっ。……という調子で、西遊記は始まるわけだ。わっ、はっ、はっ、そうですか。……といったように、読者は応じなければならない。

さて、猿人の骨のでた周口店へは、中国の国産車『上海』で行った。私たち家族四人と華僑旅行社のH氏である。助手席にH氏がその巨体をのせ、われわれはうしろの座席に詰められた。中国での車の乗り方は、これが原則である。助手席には一人しか坐らない。二人も坐れば、運転の邪魔になるおそれがある。うしろがどんなに窮屈でも、安全第一だから、辛抱しなければならない。

橋梁やビルの工事でも、高所で作業する人は、かならず命綱をつけるように義務づけられている。それがすこし不便で、工事の進行が遅れることになっても、安全のまえには仕方のないこ

ととされているそうだ。

周口店には、りっぱな『遺跡博物館』があった。おもに周口店から出土したものが展覧されているが、それと関連のある他地区出土のもの、たとえば新疆妖魔山から出土した水竜獣の化石などがならんでいた。

世界の宝といわれる、北京原人四十体分の骨は、一九四一年十二月、北京協和医学院の金庫のなかから忽然と消えた。

日米開戦の前夜、アメリカ系の協和医学院の米人院長が、いざというとき日本軍に接収されるのをおそれ、北京を撤退するアメリカ海兵隊の荷物のなかに入れて、本国へ送ろうとしたらしい。

船積予定のプレジデント・ハリソン号は、開戦と同時に日本軍に接収されたが、北京原人はどうなったかわからない。秦皇島の港湾倉庫のなかにもない。開戦のころ、荷物を積んだ艀が、転覆したという事実もあるから、水の底かもしれない。

日本が秦皇島で接収して本国に運んだという噂もあり、戦後、GHQが東京大学を調査したが、依然として不明である。

北京原人の骨が出てきたのは、竜骨山という山である。妖魔山といい竜骨山といい、いかにも西遊記ムードの名前で、ひとをワクワクさせるではないか。

竜骨がとれるので、竜骨山と名づけたのだが、もちろん想像上の動物にすぎない竜が、じっさいに骨をのこすはずはない。

古代哺乳動物の化石骨を、漢方では『竜骨』と称して、薬にしていたのである。粉にして服用

したのだが、万病に効く霊薬などといわれていた。

薬材の『竜骨』は、キズのついているものは安かった。そこでキズのついた竜骨を仕入れた薬屋は、ヤスリでそこを削ったものである。ところが、そのキズこそは甲骨文字であると判明してからは、反対にキズつきの竜骨のほうが何百倍も高くなった。貴重な古代の記録なので、風邪薬とは次元のちがう価値をもったわけだ。

資金不足のため、上等の竜骨が仕入れられず、やむなくキズだらけのを大量に買い込み、ヤスリで加工しようとした薬屋のおっさんが、一朝にして大金持になったというエピソードもある。

竜骨山は海抜一七〇メートルという。ただし、周口店のまちがすでに一〇〇メートルほどの高さなので、竜骨山はその堂々たる名称に似ず、ちょっとした小山にすぎない。北京原人や考古学にまったく興味がなければ、つまりそこをぐるりと歩くだけなら、鴿子堂洞、山頂洞、猿人洞を一巡して、二十分ほどしかかからないだろう。

中国では、いたるところにスローガンをかかげているが、遺跡博物館のなかには、

——労働創造了人和人類歴史

というのがあった。労働が人と人類の歴史をつくった、とはたしかエンゲルスの言葉である。労働は道具を使うことから始まる。これが人間さまとお猿のちがいである。

北京原人は、あきらかに火を使用していたが、これは道具なしにはできない。したがって、りっぱな人間さまだ。

お猿でこのような芸当ができるのは、わが孫悟空のほかにはいないのである。

孫悟空は石から生まれたのだが、じかに生まれたのではない。石から毬ほどの大きさの石卵が

生まれ、その石卵からオギャーとあらわれたのだ。

石が不毛の代名詞であることは、さきにも述べた。だが、石にもいろいろあるのだ。道ばたにざらにころがっている石から、米粒大で何百万円もするのがある。ダイヤモンド、翡翠、ルビーなど。

宝石のことは知らないが、周口店へ行く前日琉璃廠（北京の書画骨董文具のセンター）で印材を見たが、田黄とか鶏血石など、万年筆のキャップ大で日本金数十万円するのは、おなじ石でもうるおいがかんじられる。

孫悟空が生まれた石も、うるおいがあったのにちがいない。天地開けて以来、たえず天の真、地の秀、日の精、月の華を受けている。それでしだいに、『仙胞』をなかに育てたのである。しゃれた言い方をすれば『聖胎』だ。聖胎から生まれるのは、聖なるものでなければならない。

たとい姿はえて公であっても、生まれたばかりの孫悟空は聖なるものであった。人間ではないから、聖人とはいえないが、彼はすくなくとも聖猿であった。なみの猿ではない。その両眼から、金色燦然たる光が放たれ、それが天まで届いた。

天にましまします聖大慈仁なる天帝が、この光をみて怪しんだ。

天帝とかんたんに呼んだが、フルネームは『玉皇大天尊玄穹高上帝』である。あるいは玉帝と略してもよろしい。とにかく、天上世界のナンバーワンである。

「いったい下界になにがあったのか、調べて参れ」

と、部下の二人の将軍に命じた。

その将軍の名は、千里眼と順風耳である。

彼らが超能力のもち主であることは、その名前から察しられよう。一人は千里の遠いところまで見とおすことができ、もう一人は風のはこんでくるもの音なら、どんな小さな音でも聞くことができる。

玉帝が天界を支配し、その権力をいつまでも維持している秘密は、おそらくこの千里眼と順風耳の存在にあるだろう。

天界下界を問わず、宇宙のあらゆる情報は、この二人の将軍が迅速にキャッチして、玉帝に報告するからである。かりに玉帝にたいする謀反の企てがあっても、千里眼と順風耳の眼と耳から、かくし了せるものではない。造反は萌芽のうちに、パチンと摘みとられて、玉帝の政権はいつまでも続くのだ。天界は不老不死であるから、文字どおり永久政権である。

――飽き飽きしたなあ、もう。……

うっかりそう呟きでもすれば、順風耳がピクピクとその耳をうごかし、玉帝のところへ、

――不平の徒がおりますぞ。

と注進に行く。

声には出せないので、眉をひそめ、口をとがらし、頬っぺたをふくらませるだけでも、千里眼将軍はそのような『不快な表情』を見抜き、

――おそれながら、不逞のやからが、玉帝陛下の政治を誹謗しております。

と報告するであろう。

げにも千里眼と順風耳は便利なものである。独裁者玉帝にとっては、可愛い部下なのだ。外国で人さらいをしても、それぐらいではなかなかクビにできない。クビにすれば、我が身が危ない

ではないか。

小説やテレビでおなじみの『忍びの者』が、千里眼と順風耳の日本版であることは、すでにお察しでありましょう。

お庭番といって、将軍家じきじきのお声がかりで仕事をする。忍びの者は、べつに感涙にむせぶことはない。将軍家は千代田城にいながら六十余州の情報に通じ、それによって政権を維持しようという魂胆なのだ。情報を独占するために、じきじきのお声がかりという形式を考えついたのである。

玉帝の命令をうけて、千里眼と順風耳はさっそく調査にとりかかった。

猿と王様

千里眼と順風耳は専門家であるから、そんなに手間どらない。すぐに玉帝のいる金闕雲宮霊霄宝殿に戻って報告した。――

「黄金の光の発しまするところを、取調べて参りました。東勝神州海東は傲来小国に花果山と申す山がありまして、その山上の仙石が卵を生み、そのなかから一匹の猿がとび出し、ぴょこぴょこと四方を拝んでいたのでございます。その猿の眼から、黄金の光が出て、天まで届いたと、こういうわけでありますが、いまその猿め、水を飲んだり、木の実をくらったりしておりますゆえ、まもなく光は消え去るでございましょう。どうぞご安心のほどを。……」

生まれたままの状態であれば、聖胎から生まれた孫悟空も聖猿として、両眼から金光を放ちつづけたであろう。しかしながら、お腹は減るわ、喉はかわくわ、辛抱たまらずにこの世の汚れた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com